



74
1448

安政四年丁巳初秋新雕

緒方洪菴譯本

初帙

扶氏經驗遺訓

適適齋藏



西村正衛圖書

11-1898

扶氏遺訓序

施烏扶歇蘭士。韵府諸書無載其傳。履歷不可得而詳。然据是書題目。普魯社人任國王侍醫。伯隣大學上博士。班王國參政。蓋異數也。自序云。余忝職醫科。教授生徒。專心竭力於職事。既已五十年。因有所自得。窃謂凡日用醫療。處措著實。不涉虛妄。頗使人平康焉。又謂少年子弟始進此途。每必指授方嚮。今皆就正路矣。此二項自信既篤。則又决意欲終身無所他顧。輯心五所瀝以著一書。而大成本分職事。於是刻苦磨礪。其書始成焉。然

扶氏遺訓

卷之一序



初謂桑榆景薄。自今公之於死後而使讀是書者知其生也黃者。漠然無所求於世者之一遺言。則足矣。然而天假吾年。出於初念之外。故不忍永秘。欲裨世之言於帳中也。而况指南學者迷途之著。而久靳而不授子弟可乎。今味其言。其人以鑿道自任。器不疑。想其為人慷慨劉明。識見公正。大有超卓尋常醫人之上者。其著述精確明暢。非採擷陳言。鉅釘成書之比也。若余家世忝鑿職。而甘舍半世餘閒。白首纏綿西文者。誠可愧死焉。緒方公裁備中人。夙齡東下。從學宇榛翁。暨平誠軒。既去又西遊長崎。遂僑

居浪華。為人深沈。寸宏學博。生徒雲從。其病學通論一書。久已行於世。一時推關西大家。而自嚙如不足。恂。繙書嚮者得扶氏此書。嗜如芻豢。拮据翻譯。卒業。然謙抑自重。不妄上梨棗。近者官開洋禁。設洋館。公裁乃曰。扶氏初念欲公其書於沒後。則余今刻於我邦。以供明時之用。復何不可。於是反復校讐。遂以刷釘。余菲薄晚暮。固無足以序其書。然今也前輩凋謝。謀見推先進。無辭可推諉。然世之重精者。往之競翻譯刊刻。始不論原意當否。余甚陋之。今扶氏之書。既非尋常鑿籍。而公

裁重譯。非所謂銜鬻之倫。則不得不樂而序之也。抑
 余又竊有所感焉。扶氏躬職醫科。而班魯魯社國參
 政。則得為范文正一言之知。已於千歲之下。萬里之
 表矣。乃知宇內隨處各有人材焉。
 安政四年丁巳七月美作箕作虔儒識



浪華吳策書

凡例

一此書ハ彼邦紀元一千八百三十六年天保七年字漏生
地醫官扶歇蘭土著ハス所ニノ五十年經驗遺訓
 ト題セリ而一千八百三十八年天保九年和蘭醫官華
 傑滿其國語ニ譯セシ所ノ者ナリ扶氏自序ニ曰
 ク予病ヲ療シ人ヲ教ル者茲ニ五十年殆ト生ヲ
 醫ト學トニ終レリ故ニ諸病ノ治法學問ノ次第
 共ニ其要領ヲ發明セル者少シトセズ則今之ヲ
 集録ノ身後ニ遺シ亦將ニ以テ後學ヲ教訓セン
 トスト蓋此書ノ旨趣ニノ題名ノ由テ出シ所ナ

夫大貴儿 卷之一 凡例 適道齋藏

扶氏述言 卷之二
リ又曰ク予カ此著人ノ匿ス所ヲ匿サス人ノ文
ル所ヲ文ラス唯實ノマ、ニ之録ス是我耆老ノ
所長ナリトノ獨リ自任スルヲ得タリト今其
齡ヲ審ニスルヲ能ハスト雖氏著書ノ年紀ヲ以
テ考レハ當時年八旬ニ下ラサラン其煅煉精工
亦以テ知ヘシ扶氏ノ著書頗ル多シ就裡病學書
神經熱經驗書痘瘡治驗書等和蘭人譯セシ者往
々我邦ニ齎シ來セリ是皆醫家ノ必用タル人
ノ知ル所ナリ而其論理則懇欵ヲ盡シ今古ノ習
弊ヲ撓ノ毫モ臆度ヲ交ヘス是故ニ武烈篇和蘭人

神經熱經驗書ヲ譯シ其序ニ贊メ曰ク扶氏ノ著
書悉病床ノ實驗ニ出テ、學室ノ工夫ニ成ル者
ナシト其此贊辭ヲ冒セル著書今ヲ距ルヲ蓋三
四十年然ルヲ況ンヤ此書ノ老煉ノ後ニ成リシ
ヲヤ其濟世ニ鴻益アラニト必セリ余頃日此書
ヲ得テ之ヲ閱スルニ初メニハ諸病皆自然良能
ニ由テ治スルノ辨論ヲ舉ケ診察ノ法則ヲ示メ
シ次ニ各病治法ニ涉リ終リニハ刺絡阿芙蓉吐
劑用法ノ訣ト醫家ノ警戒トヲ詳説セリ熟讀數
回ニメ漸ク味ヒテ生シ愈玩味スレハ愈意味ノ

深長ヲ覺エ自ラ舊來ノ疑團氷釋セルヲ知ラス
殆ト寢食ヲ忘レタリ之ヲ久フシテ以爲ク此論
說ヲ以テ之ヲ同志ニ示サハ其喜ヒ亦必余カ若
ナラント是ニ於テ自ラ固陋ヲ顧ミス先ツ各病
治法ノ編ヲ譯ノ之ヲ上梓シ以テ四方ノ濟世ニ
頒ツ覽者文字ヲ以テスル勿レ

一書中每病編首ニ徵候ヲ舉ケ次ニ原由ヲ論シ終
リニ治法ヲ示ス而其說專ラ簡約ニ從フ乃自序
ニ曰ク此書勉メテ簡約ヲ旨トス故ニ徵候条ニ
ハ唯其病ノ本徵ヲ舉テ他病トノ辨別ヲ示シ原

由条ニハ其論最治術ニ益アル者ノミ摘テ之ヲ
說キ治法条ニハ特ニ治法ノ綱領ヲ示シ皆曾テ
實驗ヲ經シ者ニ撰ヘリ故ニ夫ノ新奇ノ藥方未
試ミサル者ハ一モ採用セスト乃其言ノ如ク一
篇中論說ヲ文ラス真ニ其要領ヲ掲ク學者其旨
ノ裏面ニ達セサレハ或簡約ニ憾アラシ然レ熟
讀玩味ノ能ク其要ヲ得ハ則必其施用ノ際ニ於
テ自ラ餘リアルヲ知ルヘシ

一書中人身諸器諸官及病名病證等耳目ニ慣サル
名稱ヲ新製スル者多シ是彼邦醫道研究日新ス

ルニ隨ヒ古人ノ未言ハサル所ヲ言ヒ或舊名ノ
充サルヲ改ムルニ出ツ其名稱大抵余カ譯述セ
ル所ノ病學通論ニ詳説スト雖モ洩ル所ノ者ハ
各名下ニ原語ヲ附シ或註説ヲ加ヘ以テ考證ニ
備フ其病學通論ニ出ル者ハ病符ヲ記ス且書中
ノ理論率_子病學ニ據レリ學者宜ク病學通論ニ就
テ之ヲ考索スヘシ

一書中余カ愚按ヲ加ヘテ註釋ヲナス者ハ皆其上
下ニ
ヲ記ノ之ヲ分ツ原文ヲ譯ノ分註トセ
ル者ハ別ニ符ヲ設ケス覽者混同スル_一勿レ

一書中ノ藥品方劑和蘭藥鏡名物考同補遺舍密開
宗等ニ出ル者ハ註説ヲ加ヘス唯鏡名補舍等ノ
符ヲ記ノ檢索ニ便ス若洩ル所ノ者ハ各名下ニ
附ヲ記ノ藥方編ノ後ニ其品類製法ヲ附録ス

天保壬寅夏五月

章識

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

扶氏經驗遺訓初帙目次

卷之一

第一編

急性熱病

總論

單純熱

焮衝熱

神經熱

卷之二

腐敗熱

腸胃熱

熱病論

傷寒質熱

聖京屈熱

傳染熱總論

傳染疫

列漢多疫

發黃熱

哥烏垚百私篤

犬毒狂水病

密爾多扶兒

卷之三

第二編

慢性熱病

間歇熱

遷延熱

夫大貴川 卷之一 目次

通通齊成

扶氏經驗遺訓卷之一
通商齋藏



扶氏經驗遺訓卷之一

足守

緒方章公裁

義弟郁

子文

同譯

西肥

大庭志景德

參校

第一編

急性熱病「五」グレリア「六」アキタ「七」蘭「八」

總論

凡熱病品類多シト雖モ之ヲ要スルニ心藏血脈ノ運動亢進シ諸器ノ運營増盛シ以テ體溫過越セル一轍ノ急性病ナルノミ故ニ諸熱病其初メ

扶氏經驗遺訓卷之一
通商齋藏

燉衝性ナラサル者ナク勢ヒ纔ニ増劇スレハ輒
 眞燉衝熱トナル是故ニ又諸熱病必シモ其區域
 ヲ固守セス精力ノ旺衰ニ隨ヒ生機ノ轉變ニ應
 シテ或互ヒニ交換シ移リ或逐次ニ經過シ傳フ
 ルヲアリ諭ハハ始單純熱ナル者熱性ノ飲食ヲ
 誤用メ燉衝熱ニ移リ瀉血過度ニ由テ
又神經熱トナリ終ニ亦間歇
 熱ニ變スルトナルカ如シ
 徵候 惡寒發熱脈駈數四肢倦怠小便違常之ヲ熱
 病ノ通證トス然ノ其熱一向ニ替留持續スル者
 アリ或進退弛張スル者アリ但熱證全ク間歇ス
 ルヲアル者ハ此ニ屬セス急性熱病ニ非ルヲ
 云フ後ニ本條アリ

凡熱病ノ解散スル大抵第七日第十四日第廿一
 日第廿八日ヲ以テス故ニ之ヲ分利日トス又其
 經過ヲ五期ニ別ツ初期進期極期退期復期是ナ
 リ而其極期ハ即應サニ分利ヲ營ムヘキノ期ト
 ス故ニ此時ニ於テ其分利全キ者ハ必較然タル
 排泄發汗尿有テ率復期ニ至ルマテ連綿ス分利
 若全キヲ得サレハ轉徙病變形病ヲ以テ他病ニ
 變シ或病益劇クシテ總身ノ生力虛脱シ若クハ
 貴重ノ器其害ヲ被ムリテ終ニ死滅ニ歸ス其全
 分利ヲ得ルト否ラサルトハ殊ニ皮膚ト小便ト

ヲ以テ徵スヘシ乃小便一樣ニ稀薄若クハ溷濁
ナリシ者上面澄徹麥稈色トナリ器底ニ灰白或
帶赤ノ沈渣ヲ見ハシ渾身普ク滋潤ヲ得ル者ハ
是十全ノ回復ヲ爲スヘキ兆ナリ但脈ノ短數退
テ軟緩トナルニ非レハ回復ノ諸徵具ハリ患者
輕快ヲ覺ユト雖モ未以テ信據スルニ足ラス諸
證悉去ルニ脈仍數ナル者ハ他病ニ移ルノ徵ナ
リ故ニ脈度ニ憑ルヲ最確實ナリトス

原由 凡非常ニ刺衝シテ運營ノ偏倚ヲ起ス者ハ
皆熱病ノ誘因トナル寒暖變革腸胃汚物天行毒

傳染毒等其最ナル者ナリ而素因ハ特ニ血管系

心藏及動靜
二脈ノ總稱ニ在テ神經系腦髓脊髓及
神經ノ總稱ニ拘ラス

故ニ依ト昆垤兒歌以私的里家ノ如キハ神經系

病弱ナレト急性熱ニ罹ルト少シ

或云熱病ハ皆一部ノ刺衝ニメ交感ノ爲ニ總

身ニ現ハル者ナリト此ノ如キ者亦少ナカ

ラスト雖成然リトスルハ非ナリ

凡熱病其本體一ナリ一轍ノ
急性病ト雖モ其起ル所ノ

器其感スル所ノ系同シカラサルニ隨テ各病性

ヲ異ニシ亦治法ヲ等フセス其類大率左ノ如シ

單純熱體內、器系處ヲ局メ侵サル、トナキ者是ナリ

焮衝熱 血管系專ラ侵サレテ其運動過越シ血質ノ生カモ亢盛セル者是ナリ

神經熱 神經系專ラ侵サレテ其運營變動シ精力衰弊ニ傾ケル者是ナリ

腐敗熱 血質ノ生カ專ラ侵サレテ其質溶渙セル者是ナリ

腸胃熱 腸胃專ラ侵サレテ其運營變常シ病毒内ニ鬱釀セル者是ナリ

癩麻質熱 聖京屈熱 皮膚閉塞ニ起因ノ洩乙膜粘

液膜專ラ侵サル、者是ナリ 以上六種ノ熱病各後ニ本條アリ

右ノ如ク品類區別ヲ生スル所以ノ者種ミアリ

夫驚駭ノ神經熱ヲ起シ忿怒ノ膽液熱 腸胃熱ノ一種ヲ

起シ過酒ノ焮衝熱ヲ起シ壞物ノ腐敗熱ヲ起ス

カ如キハ誘因ニ係ル者トシ誘因同一ナレトモ虛

家ハ神經熱ヲ發シ實家ハ焮衝熱ヲ發スルカ如

キハ體質ニ係ル者トシ體質ノ強弱誘因ノ異同

ヲ擇ハス衆人一般同種ノ熱病ニ罹ルカ如キハ

當時ノ越必埤密性病ニ係ル者トシ焮衝熱其劇

動ノ爲ニ生力虚脱ノ神經熱ニ轉シ腸胃ノ分泌
變常ノ腸胃熱ニ轉スルカ如キハ病勢ノ爲ニ變
性スル者トシ温補度ヲ過シテ單純熱ノ焮衝熱
ニ移リ攻瀉宜キニ適セスメ焮衝熱ノ腐敗熱ニ
轉スルカ如キハ傍來ノ事故ニ係ル者トス

治法 急性熱病ハ皆焮衝性ナリ前ニ出ツ故ニ其治法

亦防焮法ヲ以テ主トス是故ニ熱病ノ初起未其
性ヲ審ニセサル間ハ總テ此法ヲ用フルニ宜シ
抑急性熱病ハ大率皆自然良能ノ妙用ニ出ル者
ニメ其熱ハ乃排邪的ノ機撥ナリ故ニ醫治ヲ須

タスメ獨リ自ラ分利ヲ得ル者少カラス是故ニ
醫漫リニ其熱ヲ退ケン_一ヲ要セス唯其排邪ノ
機撥ヲ扶ケテ十全ノ分利ヲ得セシメン_一ヲ求
ムヘシ然メ其害ヲナス者ハ之ヲ除キ其強ニ過
クル者ハ之ヲ退ケ其弱ニ過クル者ハ之ヲ進メ
以テ那ノ運營ニ中和ノ度ヲ與フルノ外人爲ノ
得テ與カル所ニ非ス學者能ク此理ヲ了解ノ妄
リニ人壽ヲ戕フト勿レ

治法通則五件

第一誘因ヲ驅除スヘシ皮膚ノ蒸氣ヲ開達シ腸

胃ノ汚物ヲ排泄スル類是ナリ

第二熱性ヲ辨メ治法ヲ立ツヘシ防燠法。鎮瘧法。衝動法。強壯法。防腐法。疎滌法。發汗法等各其品類ニ隨フ是ナリ

第三局發ノ諸患ヲ治スヘシ

第四自然良能ノ所爲ニ注意メ分利ノ機撥ヲ扶ケンコトヲ求ムヘシ

第五證ノ變化。病ノ轉徙ニ注意メ預メ其策ヲ回ラスベシ

凡熱病ノ區別紙上ニ論スルカ如ク毎ニ井然タ

ル者ニ非ス或互ニ相轉徙シ或交相合併ノ辨別

シ難キ者多シ乃神經熱ト燠衝熱相合シ腸胃熱

ト僂麻質熱相併スルカ如シ或神經證神經熱條ニ出ツ

ノ神經熱ニ類似スルコトアルカ如ク假リニ他熱

ノ狀ヲ現スル者アリ且夫熱病斯ク品類ヲ異ニ

スト雖モ原皆一性燠衝ナリ是故ニ區別品類較然

タル者ハ固ヨリ對證ノ治法ヲ處スヘケレト否

ラサル者ハ須ク先ツ防燠法ヲ施シ蔬食ヲ與ヘ

以テ其時ヲ俟ツヘシ是治術ノ大法ナリ

將息通則七件

第一卧床ニ就テ静息セン_一ヲ要ス熱病ノ患者皆倦怠ヲ覺ユル者是卧床ニ就ント欲スルノ自然良能ナリ乃卧メ静息スレハ脈動降鎮ノ血行順調シ生力運營咸自然ノ排邪機ニ向ヒ分利ノ機撥亦凝滯ナキ_一ヲ得故ニ諸熱病共ニ缺クヘカラサルノ要務ナリトス

第二飲液多量ヲ許ルスヘシ_一諸熱病皆渴ヲ兼ル者是亦自然ノ良能ナリ此ニ由テ殊ニ能ク分利ヲ催進ス蓋飲液ハ水ヲ良トス但胃弱家_{或其液}ノ速ニ_{血中ニ達セン}ニハ大麥蒸餅林檎等ノ煮汁ヲ與_一ヲ欲スル者

フヘシ

第三食量ヲ減スヘシ_一諸熱病食欲ヲ失フ者是亦自然ノ良能タリ蓋生力運營夫ノ排邪機ニ專ラナルカ故ニ飲食消化ノ力自衰ヘ食スル所ノ物化ヤス_一胃中ニ停滯シ以テ腐壞ヲ致スナリ是故ニ強ヒテ食ヲ與フレハ體ヲ養ハス却テ病ヲ培フニ足ル殊ニ肉食ハ焮熱ヲ増スヲ以テ概ノ之ヲ禁スヘシ唯稀羹汁ニ蒸餅若クハ燕麥粉ヲ加ヘ煮ル者及煮熟セル果實_{梅李}ヲ食セシムルハ可ナリ

第四室内ノ大氣ヲ清涼淨潔ニスヘシ是熱勢ヲ減シ焮衝腐敗ヲ預防スル要法トス若室内ノ氣密閉鬱蒸スレハ他ノ所因ナキモ單純熱ヲ腐敗熱ニ轉セシムルニ足ル故ニ室内ノ溫度ハ列氏驗溫管ノ十四五度ニ越エサルヲ宜シトス而其大氣ヲ清淨スルノ最良法ハ唯新鮮ノ外氣ヲ迎フルニアリ舍密術ニ由テ消酸鹽酸等ヲ撒スルノ法アリト雖氏利少クノ却テ害多シ殊ニ肺ヲ害ス但醋ヲ取テ室中ニ撒潑スルハ益アリトス

第五善ク溫覆スヘシト雖モ衾褥輕カラニト



要ス總テ羽毛ヲ充ツル衾褥ヲ避ケ唯藁褥ニ卧ノ毛布衾ヲ被ルヲ良トス

第六神思安靜ナラント要ス凡テ情意ノ感動ハ喜怒哀樂共ニ害アリ

第七毎日上圖ヲ缺カサラント要ス煮熟セル果實梅李類ヲ喫ノ仍大便通セサル者ハ每晚灌腸法ヲ怠ルヘカラス

單純熱「五」
「六」
「七」
「八」
「九」
「十」
「十一」
「十二」
「十三」
「十四」
「十五」
「十六」
「十七」
「十八」
「十九」
「二十」
「二十一」
「二十二」
「二十三」
「二十四」
「二十五」
「二十六」
「二十七」
「二十八」
「二十九」
「三十」
「三十一」
「三十二」
「三十三」
「三十四」
「三十五」
「三十六」
「三十七」
「三十八」
「三十九」
「四十」
「四十一」
「四十二」
「四十三」
「四十四」
「四十五」
「四十六」
「四十七」
「四十八」
「四十九」
「五十」
「五十一」
「五十二」
「五十三」
「五十四」
「五十五」
「五十六」
「五十七」
「五十八」
「五十九」
「六十」
「六十一」
「六十二」
「六十三」
「六十四」
「六十五」
「六十六」
「六十七」
「六十八」
「六十九」
「七十」
「七十一」
「七十二」
「七十三」
「七十四」
「七十五」
「七十六」
「七十七」
「七十八」
「七十九」
「八十」
「八十一」
「八十二」
「八十三」
「八十四」
「八十五」
「八十六」
「八十七」
「八十八」
「八十九」
「九十」
「九十一」
「九十二」
「九十三」
「九十四」
「九十五」
「九十六」
「九十七」
「九十八」
「九十九」
「一百」
「一百一」
「一百二」
「一百三」
「一百四」
「一百五」
「一百六」
「一百七」
「一百八」
「一百九」
「二百」
「二百一」
「二百二」
「二百三」
「二百四」
「二百五」
「二百六」
「二百七」
「二百八」
「二百九」
「三百」
「三百一」
「三百二」
「三百三」
「三百四」
「三百五」
「三百六」
「三百七」
「三百八」
「三百九」
「四百」
「四百一」
「四百二」
「四百三」
「四百四」
「四百五」
「四百六」
「四百七」
「四百八」
「四百九」
「五百」
「五百一」
「五百二」
「五百三」
「五百四」
「五百五」
「五百六」
「五百七」
「五百八」
「五百九」
「六百」
「六百一」
「六百二」
「六百三」
「六百四」
「六百五」
「六百六」
「六百七」
「六百八」
「六百九」
「七百」
「七百一」
「七百二」
「七百三」
「七百四」
「七百五」
「七百六」
「七百七」
「七百八」
「七百九」
「八百」
「八百一」
「八百二」
「八百三」
「八百四」
「八百五」
「八百六」
「八百七」
「八百八」
「八百九」
「九百」
「九百一」
「九百二」
「九百三」
「九百四」
「九百五」
「九百六」
「九百七」
「九百八」
「九百九」
「一千」
「一千一」
「一千二」
「一千三」
「一千四」
「一千五」
「一千六」
「一千七」
「一千八」
「一千九」
「二千」
「二千一」
「二千二」
「二千三」
「二千四」
「二千五」
「二千六」
「二千七」
「二千八」
「二千九」
「三千」
「三千一」
「三千二」
「三千三」
「三千四」
「三千五」
「三千六」
「三千七」
「三千八」
「三千九」
「四千」
「四千一」
「四千二」
「四千三」
「四千四」
「四千五」
「四千六」
「四千七」
「四千八」
「四千九」
「五千」
「五千一」
「五千二」
「五千三」
「五千四」
「五千五」
「五千六」
「五千七」
「五千八」
「五千九」
「六千」
「六千一」
「六千二」
「六千三」
「六千四」
「六千五」
「六千六」
「六千七」
「六千八」
「六千九」
「七千」
「七千一」
「七千二」
「七千三」
「七千四」
「七千五」
「七千六」
「七千七」
「七千八」
「七千九」
「八千」
「八千一」
「八千二」
「八千三」
「八千四」
「八千五」
「八千六」
「八千七」
「八千八」
「八千九」
「九千」
「九千一」
「九千二」
「九千三」
「九千四」
「九千五」
「九千六」
「九千七」
「九千八」
「九千九」
「一萬」
「一萬一」
「一萬二」
「一萬三」
「一萬四」
「一萬五」
「一萬六」
「一萬七」
「一萬八」
「一萬九」
「二萬」
「二萬一」
「二萬二」
「二萬三」
「二萬四」
「二萬五」
「二萬六」
「二萬七」
「二萬八」
「二萬九」
「三萬」
「三萬一」
「三萬二」
「三萬三」
「三萬四」
「三萬五」
「三萬六」
「三萬七」
「三萬八」
「三萬九」
「四萬」
「四萬一」
「四萬二」
「四萬三」
「四萬四」
「四萬五」
「四萬六」
「四萬七」
「四萬八」
「四萬九」
「五萬」
「五萬一」
「五萬二」
「五萬三」
「五萬四」
「五萬五」
「五萬六」
「五萬七」
「五萬八」
「五萬九」
「六萬」
「六萬一」
「六萬二」
「六萬三」
「六萬四」
「六萬五」
「六萬六」
「六萬七」
「六萬八」
「六萬九」
「七萬」
「七萬一」
「七萬二」
「七萬三」
「七萬四」
「七萬五」
「七萬六」
「七萬七」
「七萬八」
「七萬九」
「八萬」
「八萬一」
「八萬二」
「八萬三」
「八萬四」
「八萬五」
「八萬六」
「八萬七」
「八萬八」
「八萬九」
「九萬」
「九萬一」
「九萬二」
「九萬三」
「九萬四」
「九萬五」
「九萬六」
「九萬七」
「九萬八」
「九萬九」
「十萬」羅

徵候 熱病ノ通證前ニ具フルノミニ別ニ定

徵アルヲナシ然ノ其十二時ニ進退ノ分利ヲ遂クル者之ヲ一日熱ト謂フ

原由 諸部運營過不及ナク中和ヲ得テ健康ナリ

シ者偶輕微ノ因ニ侵サレ或卒カニ傳染毒ニ感

ノ起ル所ノ熱乃是單純熱ナリ又諸熱病ノ初發

第一 率皆此熱ニ屬ス故ニ凡熱病未確然タル定

徵ヲ得サル間ハ醫姑ク之ヲ單純熱トノ從事ス

ルヲ法トス其定徵ヲ得スノ之カ性ヲ預メシ以

テ妄リニ其治法ヲ施スナハ其醫治ヲ須タスノ

自治スヘキ者或變惡ノ難治ノ病ニ轉シ或方證

全ク相反スルニ至ルヲアレハナリ喻ハハ焮衝

熱ノ初發謾ニ衝動藥ヲ投シ神經熱ノ初起誤テ

清涼劑ヲ用フル等ノ過失アルカ如シ

治法 第一二方ノ如キ輕キ防焮劑ヲ用ヒ或酒石

飲^方第三^方ヲ與ヘ且靜息セシメテ食量ヲ減シ飲液

ヲ多服セシムル等總論ノ治法將息皆適當ス^液飲

多服ノミヲ以テ治^名又芒消^名答麻林度滿^名那^名共ニ

下劑ヲ行フテ大ニ利アリ胃腸ニ汚物有テ熱ノ

爲ニ鬱滯シ更ニ害ヲ起ス者多ケレハナリ

焮衝熱「至」ブリスイフラムマトルア羅
 徴候 初起ノ惡寒極メテ太甚シク脈強數ニノ翕
 ニ發熱シ口渴キ尿赤ク皮膚舌上共ニ乾燥シ呼
 吸ト脈ト相應シ脈ト諸證ト進退ヲ一ニシ脈度
 諸證違動セス經過速カニノ整齊時期ノ次序分
 利ノ日期愆リナク發汗利尿失血等ヲ以テ分利
 ヲ得而レ其終始大抵七日ヲ限リ日ヲ延クモ十四
 日ヲ越エス然レレ神經熱腐敗熱等ニ變スレハ
 尚ホ久キヲ瀰ル此熱ノ性タル抑レ良性ナリ故ニ劇
 證モ始メヨリ適當ノ防焮法ヲ施セハ治スルニ

難カラス但動モスレハ一部ノ焮衝ヲ兼子易シ
 トス

原由 近因ハ血質ノ生力亢盛ノ動脈ノ運營過越
 シ以テ血液稠厚ヲ致スニアリ故ニ此病ニ於テ
 ハ脈管裏面亦必焮衝ナキレ能ハサル者トス素
 因ハ焮衝性ノ越レ必レ堙密「病」英堙密「病」焮衝性ノ稟賦
 少壯ノ年齡「十五歲至三十歲」或常ニ屋外ニ力作シ或肉
 食飲酒ニ飽キ或乾燥沍寒ノ氣候北風東北風ニ
 冒觸スル等ナリ而冒寒外傷非恒ノ感激一部ノ
 焮衝他熱ノ誤治等凡テ起熱ノ諸件皆其誘因ト

ナル

治法 心藏動脈ノ生カヲ減損シ纖維ヲ弛緩シ稠
 血ヲ稀渙シ熱勢ヲ退却スルヲ主トス其生カヲ
 減損スルニハ瀉血ヲ行ヒ消石類ノ清涼藥ヲ與
 へ清涼灌腸法ヲ施シ其纖維ヲ弛緩スルニハ飲
 液ヲ多服セシメ其稠血ヲ稀渙スルニハ甘汞ニ
 消石ホト剉ア篤ス亞ス斯ス鹹蓬鹽名共ニ等ヲ配用シ其熱勢ヲ
 退却スルニハ冷氣冷水ヲ外用内服スルニ宜シ
 而其最主トスヘキ者ハ刺絡ナリ蓋シ刺絡ハ悉
 右ノ功能ヲ兼攝スル者ニメ生カヲ減殺シ焮衝

ノ劇證ヲ拯フト之ヨリ的切ナル者ナシ然リト
 雖モ此術ヤ謹慎メ之ヲ行ハントヲ要ス若誤テ
 無益ニ多量ノ血ヲ奪ヘハ隨テ濟フヘカラサル
 ノ大害並ヒ起ル乃血液誤奪ニ由テハ焮衝熱轉
 メ神經熱腐敗熱ニ陥リ或生カ脱亡メ分利ノ機
 撥ヲ致スト能ハサルニ至リ或遷延彌久メ衰弱
 難治ノ諸患ヲ招クニ至ル是故ニ其證ノ輕重ヲ
 分テ之ヲ高量セントヲ要ス
 輕證 唯食量ヲ減メ清爽ノ品ヲ與へ靜息多飲
 等總論ノ通則ニ準ヒ清涼下劑ヲ用ヒ消石ヲ内

服セシムレハ乃_チ足ルナリ胃弱家及_レ下利劇キ徒
ハ礪砂ニ吐酒石名共ニヲ加ヘテ消石ニ代フヘシ
乃_チ第四方ノ消石ヲ礪砂ニ換フルカ如シ若_シ消石
ヲ連用スヘクメ衰弱ヲ起スノ恐レアル者ハ消
酸曹達舍ヲ以テ之ニ代フヘシ乃_チ第五方ノ消石
ヲ去テ同量ノ消酸曹達ヲ加フルカ如シ或_シ其初
發ニ當テ速_{ハヤ}ク第六方ノ清涼下劑ヲ與フルモ大
ニ功アリ

重證 諸證劇烈脈殊ニ強實ニメカアル者はナ
リ此證ハ唯嚴ニ攝養ヲ慎ニテ刺絡ヲ行フノ外

毫モ他技ヲ要スルコトナシ刺絡ノ功害亦用法ト
分量ニ係ルコト他ノ諸藥ニ於ケルト一般少ニ過
クレハ功ヲ爲サス多ニ失スレハ害ヲ招ク能ク
法ニ適メ之ヲ行ヘハ唯一回ニメ其功遙カニ數
回ノ者ニ優ル其法則左ノ如シ

第一 早ク之ヲ行ハンコトヲ要ス焮衝ノ初起ニ當
テ之ヲ行フコト愈早ケレハ其奏功愈大ナリ若_シ諸
證既ニ全ク發メ而後之ヲ行フハ三四回ニ及ヒ
且多量ヲ洩ラスモ猶初起ノ一微瀉ニシカス
第二 瀉血ノ量ハ唯焮衝ヲ除クニ足ルヲ度トス

必過度ナルヘカラス其量ヲ定ムルニ容量重量
 ヲ以テセス宜ク徴ヲ脈ニ取ルヘシ甲ハ一比ヲ
 瀉メ足ル氏乙ハ一比半乃至多量ヲ瀉メ未足ラ
 サル者アレハナリ故ニ施術中屢脈ヲ按メ其強
 實ナリシ者降鎮メ軟緩ト爲ルヲ診シ得ハ乃
 止ムヘシ決メ卒倒スルニ至ルヲ勿レ其已ニ稠
 厚トナレル血液卒倒ニ由テ循行滯止スレハ凝
 泣メ心藏及大血脈ノ裏面ニ繫著シ以テ贅肉狀
 ノ者ヲ生シ所謂剝列或肺ニ壅塞メ更ニ肺焮衝ヲ
 起スヲアレハナリ其卒倒ヲ防クニハ仰卧セシ

メテ之ヲ行ヒ脈不齊若クハ結代ヲ見ハサハ直
 チニ止ムルヲ宜シトス

第三 血ノ迸出急疾ナルヲ貴フ故ニ鍼口大ナラ

ンヲ要ス迸血弧線ヲナシテ急疾ニ射出スレ
 ハ脈管ノ勢ヒ頓縮スルヲ得テ焮衝ヲ撲滅ス
 ルニ足レリ緩徐ニ流出ノ臂ニ浴ヒ或搾出ノ稍
 ク泄ル者ノ如キハ脈管ノ怒力ヲ轉セシメサ
 ルヲ以テ功ヲ奏スルヲナシ故ニ急疾ニ迸射ス
 ル血一比ハ緩徐ニ流泄スル血ノ三四比ヨリモ
 其功迥カニ超絶ス而其刺處ハ尺澤ヲ良トス其

最心藏ニ近キヲ以テナリ

患者多血強實ニノ年齢少壯十八歳至三十歳ナル者平

生刺絡ニ慣ル徒ノ其期ニ當ル者痔血衄血等ヲ

得レハ常ニ爽快ヲ覺ユル者一部焮衝ノ微ヲ見

ハス者或乾燥沍寒ノ候越必^エ埴^ミ密ノ專ラ焮衝性

ナル等皆刺絡必當トス故ニ若刺絡ノ當否辨シ

難ク功害預メ決シ得ヘカラサル時ハ宜ク此諸

件ヲ參考スヘシ或試ニ絡ヲ刺シテ其當否ヲ決

スルモ亦可ナリ其法先ツ一二弓ノ血ヲ瀉ノ其

脈細數ニ陷ル者ハ直チニ之ヲ止メ其緩縱ヲ覺

ユル者ハ益之ヲ洩スヘシ

刺絡ニ代フルニ蜚鍼吸角等ヲ以テスルハ宜シ

カラス或以爲ラク四十個乃至六十個ノ蜚針ヲ

施ノ多量ノ血ヲ泄ラサハ亦刺絡ト功ヲ同フス

ヘシト是唯嬰兒虛弱ノ徒ノ一部焮衝ヲ患フル

者ニ代用スヘキノミ真ノ焮衝ヲ根治スルニハ

逆射急疾ノ瀉血ニ由テ脈管ノ萎縮ヲ誘フニ非

レハ必功アル者ヲ見ス且夫刺絡一回ニノ必シ

モ足ル者ニ非ス初瀉ノ後焮衝未減スルヲ得

スノ四時六時若ハ十二時ヲ經テ熱更ニ増盛シ

脈故ノ強大ニ復セハ再ヒ之ヲ行フヘシ或三四
回モ逐次ニ行ハサルヘカラサル者アリ但之ヲ
行フ毎ニ必細慎ノ脈度ニ注意シ其瀉出セル血
ノ皮膜所謂嫩ト參勘メ分量ヲ斟酌スヘシ然レ
凡唯皮膜ノミヲ以テ憑依トスルヲ勿レ全身ノ
血液瀉シ盡ス凡尚皮膜ヲ結フ者アレバナリ
刺絡ノ功用右ノ如シト雖モ尚之ニ兼ルニ清涼
下劑ヲ取テ少許宛與ヘ以テ上圍三四行ヲ得セ
シメ而後消石二三錢ニ吐酒石少許ヲ加ヘテ一
晝夜ニ之ヲ用ヒ或礪砂ヲ與フルト前證輕ニ於

ケルカ如クスヘシ但峻下劑ハ熱勢ヲ増進メ却
テ害アリ

單純ノ焮衝熱ハ治法右ノ如クニメ終始清涼ノ
食養ヲ命シ以テ自然ノ分利ヲ俟ツヘキノミ多
ハ熱證自退散ノ別ニ他技ヲ要スルヲナシ然レ
凡其熱證ノ退散轉徙病ニ因ル者亦少ナカラス
是多クハ感冒等ノ加ハルニ由テ分利ノ機撥妨
害ヲ受ルニ出ツ而其轉徙或麻痺不遂健忘等ヲ
起ス者アリ芫菁膏名ヲ良トス或膿腫皮疹等ヲ
發スル者アリ膿腫ハ緩和布ヲ貼シ若クハ刺

大貴川 卷之一 五 適適齋藏

衝藥ヲ外敷ノ釀熟潰破ヲ促スヲ佳トス

或熱證在再トノ退カス若ハ焮衝ノ候ナキニ第

六七日ニ至テ却テ増熱シ而適宜ノ分利ヲ得サ

ル者アリ此時ニ當テハ治法ヲ轉メ以テ分利ヲ

得セシメンコトヲ要ス乃民埴列里精補三十滴至

六十滴ヲ取テ每一時之ヲ與フルニ宜シ謹テ強

キ衝動藥ヲ投スルコト勿レ動モスレハ更ニ焮衝

ヲ發シ易ケレハナリ而仍功ナキ者ニ證アリ一

ハ焮衝去テ心藏血脈ニ虛性ノ感動過敏ヲ殘セ

ル者ナリ民埴列里精ニ老利兒結爾斯水補一晝

夜ニ一晝

錢許ヲ加ヘテ之ヲ與フヘシ一ハ過度ノ瀉血等ニ

由テ既ニ神經熱腐敗熱若ハ遷延熱等ニ轉セシ

者ナリ各對證ノ治法ヲ處スヘシ

凡純一ノ焮衝熱後ハ強壯治法ヲ要スル者少ナ

シ殊ニ幾那ノ類ハ甚宜シカラス動モスレハ更

ニ血液ノ刺衝ヲ喚起スレハナリ但忽弗滿氏越

栗失爾必設刺兒附六十滴ヲ取テ日ニ二次之ヲ

與フルハ大ニ佳トス

神經熱

セーブリス子ルホサ羅

徵候 初起ノ惡寒。焮衝熱ノ如ク甚シカラス。微ニ
 寒戰ノ熱ト交發シ始メヨリ頭重。頭痛。憂思。悒悶。
 眩暈。振慄。昏冒。卒厥等ヲ發シ次テ虚脱疲勞ヲ覺
 エ譫妄。嗜眠。内外諸般ノ痙攣搐掣等神經腦髓ニ
 係ル諸患ヲ現ス而現候屢違動シ脈細數軟弱或
 緩徐ニノ頻リニ轉易シ小便或赤或白。定色ナク
 ノ多クハ黃濁シ呼吸ト脈ト相應セス諸證反乖
 シ彼此合致セス或口乾テ渴ナク或病劇フメ自
 輕快ヲ覺エ或打痛ノ因芥子泥ヲ貼スル類モ絶テ痛ヲ發
 スルヲナク凡テ他ノ熱病ノ定徵ヲ見ハサス且

焮衝熱ノ如キ整齊合致ノ諸候ヲ具セス焮衝熱ハ脈常
ニ強實現候尿管ニ變易セス經過期ヲ守リ諸
證互ニ相應シ就中脈ト呼吸ト常ニ緩急ヲ等フ
ス然レモ亦諸證實錯雜ノ焮衝熱ト辨別シ難キ
 者アリ此ノ如キ者ハ謹慎ヲ加ヘテ試ニ刺絡シ
 一二弓ノ血ヲ瀉ノ以テ其功績如何ニヲ視ルヘ
 シ之ニ由テ脈發揚シ差緩縱ヲ見ハス者ハ焮衝
 熱ナリ愈多量ノ血ヲ泄ラスニ宜シ脈若沈ンデ
 細數ニ徙ル者ハ則神經熱タルヲ疑ナシ直チニ
 刺絡ヲ舍ヒテ對證ノ治法ヲ決スヘシ又神經證
 ト神經熱ヲヨク區別セサルヘカラス動モスレ

抄氏遺言 卷之二
ハ彼此混同ニ易キアリ所謂ル神經證ハ他ノ
熱病ニ罹レル患者神經虛弱ニノ觸覺過敏ナル
ヲ以テ恰モ神經熱ノ如キ諸候ヲ現スレ其
ハ非ナル者ナリ其他辨別シ難キ諸證少ナカラ
ス須ラク審診ノ明辨スヘシ

神經熱ノ經過ハ次序アルナシ然レモ大抵發
病前數日若ハ數週頭重眩暈四肢顫振頭痛不寐
多夢等ノ前兆有テ其分利スル率第廿一日或第
廿八日ニ於テシ或尚日ヲ延ク者アリ其復故亦
甚緩慢ニシ且再發シ易シ劇證ハ治後二三月ヲ

經テ漸ク故ニ復スルヲ得其治スル者モ亦十
全ノ分利ヲ以テスル者少ナク多クハ轉徙變形
病ニ歸ス故ニ或粟疹癩瘡膿腫壞疽或耳聾眼盲
健忘精神病或遷延彌久ノ神經病胸腹ノ諸病等
ニ終ハルヲ常トス而其死スル者ハ生力ノ虛脱
血液ノ溶崩腦髓ノ麻痺焮衝壞疽等ニ徙ルニヨ
ル

凡此病ハ患者感覺ヲ錯マリ諸證違動ノ定リナ
ク内外相反スルヲアルヲ以テ其安危ヲ預メス
ルヲ甚難シ乃外候順良ナル者不意ニ腦髓麻痺

扶氏遺訓 卷之一 九

等ヲ發メ斃レ死徵悉具ハル者頓ニ十全分利ヲ得ルコトアリ然レ其安危大約左ノ證候ヲ以テ徵知スヘシ

脈動短數愈進ム者ハ危險愈大ナリ而穩靜ナル者ハ總テ平安ナリ

小便極メテ澄徹ナル者濃厚ニシテ褐色ナル者血ヲ交フル者或雲翳唯上面ニ浮ヒ若クハ器底ヨリ升テ上ニ向フ者或沈塗極メテ多クノ上邊清澄ナラサル者皆大危險ノ徵ナリ原濃厚ナリシ者漸ク澄徹トナリ清稀ナリシ者差溷濁スルハ

共ニ良徵ナリ而上面澄徹麥稈色沈塗適宜ナル者ハ必治ノ徵タルコト疑ナシ

腦髓神經機關精神恍惚嗜眠昏睡スル者感覺觸

知ヲ失フ者或病進テ觸覺益過敏ナル者局處ノ麻痺ヲ發スル者舌痲ノ出シ難ク言語難兩便失禁スル者劇キ

搐掣拘急ヲ起ス者等ハ皆大惡徵ナリ

皮膚渾身溫度同等ナラス或乾燥ノ弛緩シ或粘

汗流漓シ或早ク粟疹ヲ發シ病末ニ發スルハ善徵ナリ或紫

斑ヲ見ハス等皆惡徵ナリ

自餘失血殊ニ尿血便血下利紫斑毒瘡局處死壞總身腐

扶氏遺訓 卷之一 九

臭等。血液溶崩ノ候アル者ハ最危篤トス而其死
 期ニ迫マル者ハ乍チ寤メ乍チ眠リ腹脹滿ノ泄
 瀉シ咽喉不利昏睡鄭聲摸床理線等ノ諸證ヲ現
 ス然レ氏此ノ諸候斷ノ死徵ト定メ難シ斯ノ如
 キ者モ猶活路ニ趣クテアレハナリ但耳聾ハ大
 抵善徵トス

此病輕證重證替留證往來證急證慢證等ニ區別
 スト雖氏合併ヲ以テ分ツ者治術ニ益アリトス
 故ニ心藏血脈ノ變動甚シカラスノ他ノ合併病
 ナキ者ハ單純神經熱ト名ケ心藏血脈モ頗ル侵

サレテ其運動昂盛スル者ハ焮衝性神經熱ト名
 ケ血脈ノ運營衰弱ノ血液ノ生力脱耗シ以テ溶
 崩ニ傾ク者ハ腐敗性神經熱ト名ケ^レ痺麻質^ナ聖京^ニ
 屈ヲ兼ル者ハ痺麻質性神經熱聖京^ニ屈性神經熱
 ト名ク

原由 近因ハ腦髓神經ノ騷擾ニノ其餘弊心藏血
 脈ニ波及シ兼ルニ生力衰弱ヲ以テス故ニ神經
 ニ係ル諸患主證ト爲テ血脈ニ係ルノ諸證ヲ兼
 併ス或^レ其變動血脈ニ逮ハス脈度體温大ニ常ヲ
 違ヘサル者アリ或焮衝ノ素因有テ焮衝熱證ヲ

現ハス者アリ或虚性ノ素因有テ直チニ腐敗熱
 ニ陷ル者アリ而榮養不給食物腐壞酸素不足室密
稠人雜大氣不良居室不血液脱泄等凡生力ヲ減
 耗シ神經ヲ罷弊セシムル諸件或房事勞力温被
 等ノ過度熱性藥ノ過用瀉血證ニ瀉血ヲ怠ル者
 既往ノ疾患他種ノ熱病等ノ如キ刺衝過度ノ諸
 件或憂苦悲愁濕氣寒冷等ノ如キ生力抑壓ノ諸
 件皆此病ノ遠因素因トナル誘因或直チニ傳染毒ニ
 起因スル者モ亦之アリ

治法 神經ノ運營ヲ整復シ血脈ト神經トノ對稱

ヲ調和スルニアリ但此病常ニ衰弱ヲ兼ルヲ以
 テ終始茲ニ注意セン₁ヲ要ス₂故ニ其焮衝性ノ
 者ハ固ヨリ防焮劑ノ適當スル所ナレ₁氏眞焮衝
 熱ノ如ク強ク之ヲ用フル₁ヲ得ス而其衰弱大
 ニノ腐敗ノ恐レアル者ハ衝動強壯ノ藥ヲ用ヒ
 其痙攣搐掣等甚キ者ハ鎮痙降和ノ法ヲ處スヘ
 シ且患者ノ體質誘因當時ノ越必₁坵密等ヲ推按
 シ殊ニ其傳染ニ起ルト内部ヨリ發セルトヲ辨
 スル₁緊要ナリ蓋傳染ニ起リシ者ハ卒爾ニ來
 ルカ故ニ大率實性ニノ焮衝ヲ挾ミ内部ヨリ發

セシ者ハ神經精力ノ所患ニ原クヲ以テ多ク皆
虚性ニ屬ス凡此熱ハ其解散早キモ三週以内ニ
アラス且持リ自然ノ分利ニ委任スヘキ者少ナ
シ故ニ治術ノ要ハ努メテ患者ヲノ危険ノ時期
病初ヨリ第十ヲ保續セシムルニアリ而各證ノ
八日ニ至ル

治法大同小異アリ左ニ之ヲ列ス

輕證神經熱即單純神經熱神經熱ノ通證ヲ具フレ氏輕

クノ脈甚短數ナラス譫語セス或之ヲ發スルモ

少焉ニメ乃止ム是多クハ重證神經熱ノ初期ナ

リ此證ハ妄リニ衆方ヲ禱用センヨリ簡易ノ治

法ヲ處セン_一ヲ要ス即蘇魯林水第七方日ニ半ヲ

至一_一ヲ與ヘ卧シテ靜息セシメ室中寒暄不同

ナカラシメ兼テ足部ニ芥子泥名ヲ貼スルヲ佳

トス予每常唯此法ヲ須ヒテ全功ヲ收メシ_一少

ナカラス然_レノ仍功ヲ奏セサル者ハ纈草泡劑第八方

方民堙列里精補忽弗滿鎮痛液名嚴醋等ヲ飲液

ニ加ヘ用ヒ芥子泥微溫浴ヲ行ヒ以テ蒸氣ヲ催

進シ皮膚ノ分利ヲ促サン_一ヲ要スヘシ然_レ氏

腸胃汚物ヲ夾ム者ハ吐下劑ヲ兼用シ樓麻質證

アル者ハ民堙列里精補安質沒扭名等ノ緩性發

汗藥ヲ兼用スル類合併證ヲ忽ニスルヲ勿レ但
熱性發汗劑ハ宜キ所ニアラズ

重證神經熱譫語嗜眠搐掣等頭腦ノ所患劇甚ナ
ル者是ナリ蓋此ニ腦焮衝證神經虛脫證ノ二般
アリ

腦焮衝證眼光爛ニ赤ヲ帶ヒ顔面紅活盈張シ頭

脈怒起シ頭顱灼熱シ小便赤色ニノ脈實數ナル

者ハ腦髓ノ壓迫甚シケレ是ナリ尚且當時越必埤

密ノ焮衝性患者年齡ノ少壯等ヲ併考セハ乃能

ク確實ナルヲ得ヘシ而後疑似仍決シ難キニ

方テハ謹慎ヲ加ヘテ試法ヲ用フルモ可ナリ即

葡萄酒一二匙ヲ與ヘテ譫語數脈増進スル者ハ

焮衝證タリ減退スル者ハ則虛脫證タリ或刺絡

ノ血少許ヲ洩ラシ脈沈細數トナル者ハ焮衝證

ニ非ルヲ必セリ焮衝證ハ固ヨリ防焮法ヲ行フ

ヘシト雖モ其熱ノ本性神經衰弱ナルヲ以テ終

始此ニ注意ノ從事セニテ要ス故ニ刺絡セシ

ヨリハ一部瀉血顛顛項富耳後ニ蟻ヲ佳トス唯

患者少壯多血ニノ平常刺絡ニ慣レ且其脈強實

ナル者病ノ初期ニ於ケル者傳染毒ニ起因セル

者等ハ刺絡ヲ行フテ可ナリ然レ氏頓ニ多量ノ
 血ヲ瀉セス少許ツ、泄ラスヨ良トス是故ニ亦
 消石ヲ與ヘニヨリハ礪砂孕礬酒石名ニ吐酒石
名少許ヲ加ヘテ用ヒ且水ヲ以テ頭頂ヲ冷漏シ
或氷片ヲ每一時冷浴法ヲ行ヒ醋三四ヲ用ヒ
外貼ステ灌腸法ヲ施シ毎日芥子泥ヲ脚腓ニ貼スル等
 ヲ宜シトス而頭腦ノ所患速ニ減スルヲ得サ
 ル者ハ每一時考ハ每甘汞名一匁至二匁ヲ與フ
 一ニ但但全身冷浴法ハ皮膚乾燥ノ灼熱甚キ者ニ
 宜キノミ皮膚滋潤スル者ハ決メ行フヘカラス

右ノ諸法ヲ行フ一二日頭面部ノ紅灼減シ
 脈細軟ト爲テ頭腦ノ所患仍未退カサル者ハ已
 ニ是虚證ニ移レル者ナリ此時ニ方テハ阿芙蓉
名四分匁ニ甘汞一匁ヲ合ノ每一時之ヲ與ヘ芫
 菁膏名ヲ項窩ニ貼スルヲ無比ノ良法ナリトス
 神經虚脱證始メヨリ全ク熈衝ノ候ナキ者或原
 熈衝證ナリニ其證既ニ去テ熱仍持留シ或却
 テ増劇セル者是ナリ治法ハ強壯衝動鎮壓ノ諸
 方ヲ用ヒテ專ラ神經力ヲ復治スルニアリ此證
 ニ於テハ譫語頭痛脈ノ短數皆衰弱ノ兆ナリ故

二揮發衝動藥ノ功アルヲ猶瀉血ノ焮衝證ニ於
 ケルカ如シ蓋彼ニ在テハ脈カノ減退ヲ回復ノ
 徵トシ此ニ在テハ其増進ヲ善徵トスル等諸件
 全ク相反對ス亦過敏麻痺腐敗ノ三證アリ
 過敏證譫語煩燥頭痛羞明搐掣拘急等總テ動覺
 兩機病ノ亢盛ヲ徵シ脈細數ニノ緊ヲ帶ノ此證
 ハ動機亢盛セルヲ以テ動モスレハ焮衝證ニ轉
 スルノ恐レアリ卒カニ過強ノ刺衝藥ヲ用フル
 勿レ但其初起内外力ヲ戮セテ微々揮發鎮痙
 神經劑ヲ與ヘ其諸證退カサルニ準ヒ漸ク進

テ峻劇ニ移ルヲ良トス殊ニ能ク脈ト證トヲ參
 勘シ脈更ニカヲ得テ諸證退クニ至ルマテ漸ク
 藥カヲ強メントヲ要ス其法服量ヲ増シ藥味ヲ
 多クシ品類ヲ交換シ用法ヲ轉スル等ニアリ神經
ノ性タル刺衝ニ慣習シ易キヲ以テ一藥ヲ連用
スレハ奏功漸ク衰フル者ナリ故ニ服量ヲ増シ
藥味ヲ多クスルノミナラス品類ヲ交換シ用法
ヲ轉スルニ非レハ藥カヲ強ムルヲ能ハス用法
ヲ轉スルトハ或散トシ或丸トシ或煎劑トシ或浸
劑トシ或灌腸法トシ或浴湯法トシ用フル等ノ
類ヲ而其藥劑ハ就裡硫酸常用フ下利甚キ者ハ鹽
 酸ニ以テ葡萄酒ヲ以テ終始連用スヘキ品トス
 殊ニ二十年許ヲ經シ列印設酒ハ他藥ヲ假ラスメ
 度ヲ量テ多少斟酌シ用フレハ他藥ヲ假ラスメ

夫大貴川 卷之一 通題解

全治ヲ得其他纈草白芷鏡亞兒尼加名ノ濃浸劑
第九方ヲ用ヒ衰弱尚増進スル者ハ纈草油加耶
普的名油桂油名各皆忽弗滿鎮鹿琥精補等而仍功
ナキ者ハ亞的兒甘消石精過設印亞的兒拔爾撒
謨字露名忽弗滿拔爾撒謨非答附等尚衰弱甚フ
ノ腦ノ所患退カス脈細軟弱ナル者ハ鞞布羅名
瘵孿劇シク脈細小ニノ緊ヲ帶フル者ハ麝香名
譎語瘵孿疼痛吐逆下利等劇クノ脈沈細數ナル
者ハ葛私多樓謨阿芙蓉ヲ與フヘシ蓋阿芙蓉ハ
服量多ケレハ麻醉藥トナリ少ナケレハ衝動藥

トナル故ニ神經證劇キ者ハ多量ヲ用ヒ衰弱大
ナル者ハ少量ヲ用フヘシ而芳香藥ノ蒸漏法窩
ニ施芥子泥日ニ一回重證強壯藥ノ灌腸法香竈
藥ノ微温浴列氏驗温管ニ十八度許ノ温ニ等
強壯衝動ノ物ヲ外用シ食養ニハ卵湯鹿角膠共
葡萄酒者和スル者肉羹汁等輕キ滋養強壯ノ品ヲ與フヘ
麻痺證各部知覺ヲ失フテ不遂シ或諸部ノ括約
筋麻痺シ嗜眠昏睡鄭聲スル者是ナリ初起ヨリ
此證ヲ發スル者アレバ多クハ過敏證ノ進惡セ

ル者ナリ前條ノ諸藥ヲ合メ多量ニ與ヘ且、礪砂
加石灰精名經年葡萄酒。亞爾箇兒名燐舍等ヲ兼
用シ新鮮清涼ノ外氣ヲ迎入スル等決メ缺クヘ
カラス病勢此ノ如キニ至レハ殆ト消滅セル生
機唯強劇ノ刺衝藥ニ由テ維持セラル、ノミ實
ニ患者ノ性命。醫者ノ手中ニ懸レリト謂、ヘシ患
者全ク脱カノ人事ヲ省セス感覺舉動共ニ絶エ
腹肚脹滿大小便失禁等死徵悉具ハル者モ左ノ
治法ヲ行フテ其命ヲ挽回セシトアリ即經年ノ
葡萄酒ヲ撰テ一匙ツ、口ニ注キ芫菁膏名五枚

ヲ造テ一ハ心窩ニ貼シ餘ハ四肢ニ貼シ香竈強
烈ノ藥草ヲ葡萄酒或燒酒ニ浸メ微溫浴トシ冰冷
ノ罨法ヲ少腹ト頭上ニ施シ且、第十一方ヲ與ヘ
テ頭上ニ艾灸法ヲ行ヘリ

腐敗證前證ヨリ移リ來ル者アリ病初ヨリ發ス
ル者アリ證候治法後ノ腐敗熱條ニ詳説ス

又腸胃ノ患ヲ兼ル神經熱ニ證アリ一ヲ瓦斯篤
里神經熱ト曰ヒ一ヲ英底里扶神經熱ト曰フ

瓦斯篤里神經熱 腸胃汚物證或、蛔蟲證ヲ合併
スル者ナリ治法ハ神經熱治法ニ腸胃熱治法ヲ

兼又へシ但疎滌藥ヲ用フルニハ殊ニ注意ノ其
衰弱ヲ加へサラシテ要ス 腸胃熱篇ヲ
參考スヘシ

英底里扶神經熱 神熱兼腸
衝ノ義 徵候甚辨シ難シ

但下利メ少腹鈍痛シ其痛殊ニ左方ニ偏シ或之

ヲ按ノ始メテ其痛ヲ知リ且其部稍膨脹セル者

是ナリ解屍ノ之ヲ檢スルニ腸ノ裏面 殊ニ小
腸ノ腺

衝メ小斑點ヲ發シ少隆起ノ潰瘍狀トナレリ然

レ凡是真ノ焮衝ニ非ス唯熱毒ノ腸ニ轉輸ノ此

ニ分利セルノミ猶胃管ニ驚口瘡ヲ發シ皮膚ニ

粟疹ヲ生スルト同比ナル者ナリ治法ハ神經熱

治法ノ外患部ニ蟻鍼冷濕法ヲ施シ蘇魯林水 舎

ニ亞刺比亞護謨 名 ヲ加ヘテ内服セシメ頑固證

ハ甘汞三瓜至六瓜日ニ二三回與フヘシ

凡神經熱荏苒瀰久ノ已ニ遷延病ニ移ラントス

ル者ハ毎日微溫浴ヲ行フヨリ的實ノ功ヲナス

者ナシ差後ノ衰弱ハ麥芽煎汁ノ微溫浴ヨリ速

ニ精カヲ復スル者ナシ

扶氏經驗遺訓卷之一 終

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

天正三十四年
九月十日

小田原
徳川家
印

徳川家印

